Ⅰ　開講科目および開講状況

平成 22 年４月、全学共通履修科目「日本語表現」（開講主体：全学日本語教育部門）が開講された。

本章では、日本語表現科目の全体像、および平成 22 年度から 25 年度までの４年間の開講状況について報告する。

1. 日本語表現科目の全体像　（外山敦子）

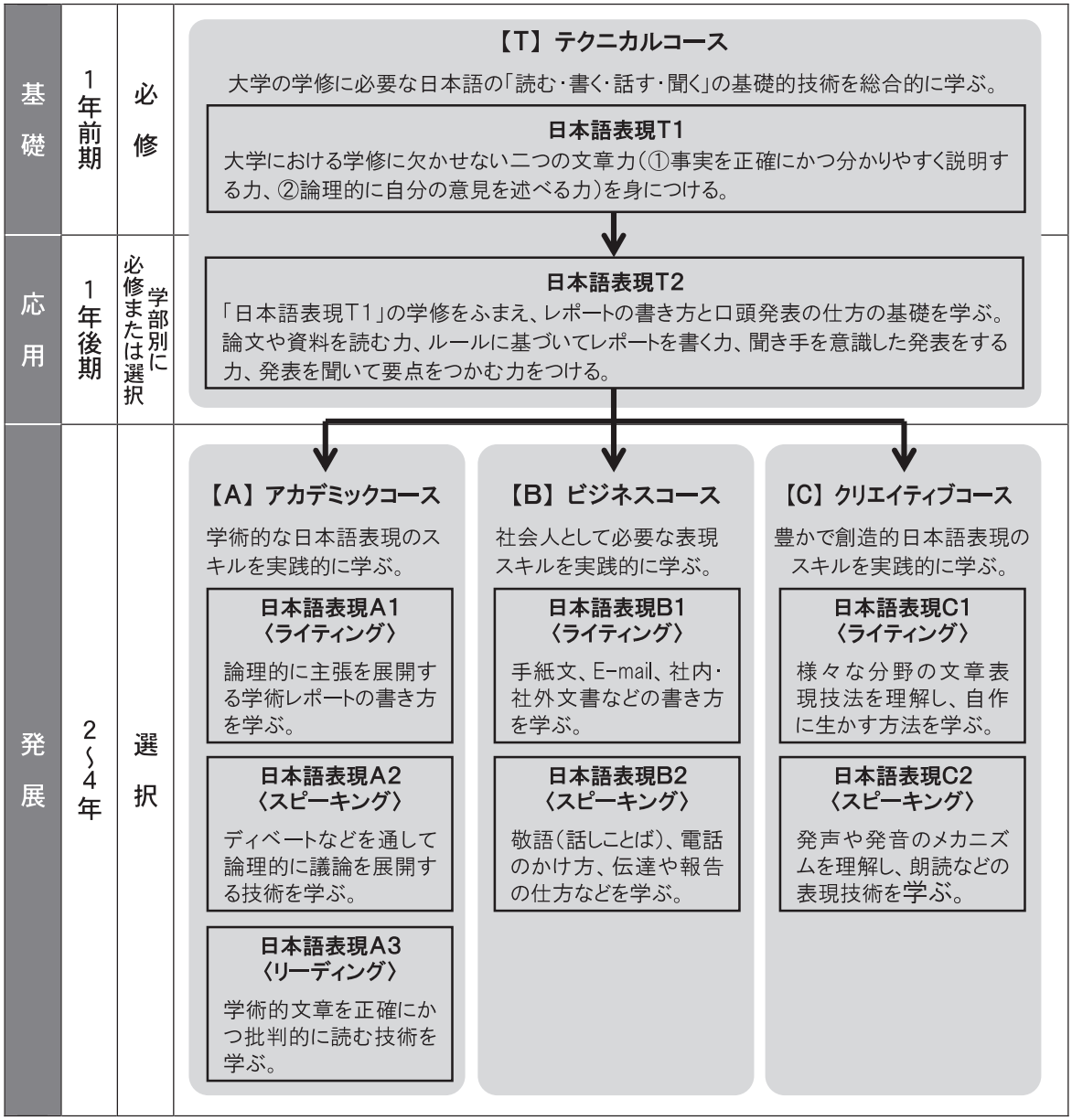
2. 開講コマ数および履修者数

2-1）開講コマ数

2-2）履修者数の推移

1．日本語表現科目の全体像

本学では、平成22年度から、大学における学修や社会生活の営みに必要な日本語運用スキルを総合的に養成する日本語表現科目を開講している。本科目群は、段階的に日本語運用能力を高めるため、「基礎」から「発展」までの体系的なカリキュラムを整えている（図Ⅰ-1）。大学生として身につけるべき最低限のレベルを全学部学生の必修科目とし、より高度で実践的なレベルは各自の興味や関心に応じて自由に履修することができることとする。



図Ⅰ-1 日本語表現科目の全体像

日本語表現科目のカリキュラムの特徴は、以下の５点である。

①　同一シラバスに基づく指導内容の統一

「日本語表現 T1」および「日本語表現 T2」では、複数の教員が共通のシラバスに基づき、同一内容・同一進度・同一評価によって授業をおこなっている。そのため、授業担当者会議（年２回、非常勤講師を含む）、部門会議（月１回、専任教員のみ）を開催して指導内容の統一を図るだけでなく、コーディネーターを中心としたメール連絡を密にし、日常的に情報共有をおこなっている。

②　本学オリジナルテキストの作成

「日本語表現 T1」および「日本語表現 T2」では、本学専任教員が作成したオリジナルテキストを使用している。本テキストは、「新入生学習力調査（国語）」（毎年４月実施）の結果や前年度の授業における反省に基づき、原則として年１回改訂し、本学学生の最新の学力レベルに即応している（「Ⅲ　テキストの発行」参照）。

③　「基礎」→「応用」→「発展」の段階的学修到達目標の設定

本科目では段階的に日本語運用力を高めるために、「基礎」から「発展」までの体系的なカリキュラムのなかで、各科目の到達目標を明確に定めている。レポート課題であれば、テーマの種別、文字数、参考文献の有無などの難易度を段階的に引き上げることで、効率よく高度な文章力を育成できるようにする（**表Ⅰ-1**）。

表Ⅰ-1　各ステップにおける文章表現力の目標

開講期	1年前期			1年後期	2～4年
科目名	日本語表現 T1			日本語表現 T2	日本語表現 A1
課題	小論文（説明）	小論文（意見）	小論文（意見）	レポート（報告）	レポート（論述）
テーマの種別	日常生活	日常生活	社会問題	社会問題	自由
字数	700 字	800 字	1,000 字	4,000 字	4,000 字以上
参考文献	不要	不要	必要	必要	必要

④　少人数クラス編成による実践演習中心の授業

実践演習を中心とした密度の高い授業を実現するために、原則として科目ごとに 30～50 人の定員を設けている。特に、「日本語表現 T1」と「日本語表現 T2」では、少人数編成を生かしたグループワークを随所に取り入れ、学修効果をより高めるプログラムを構築している。理論と実践との相乗効果によって、短期間で高度な日本語運用スキルを身につけることが可能である。

⑤　学士教育課程全体を見据えたカリキュラム設定

近年、初年次教育の一環として同様の科目を開講する大学が増えている。しかし本学で

は、初年次のみならず、学生の学修段階に応じた日本語運用スキルを継続的に学修できるよう、より高度で実践的な発展科目をコース別に開講し、学士教育課程全体をサポートしている。

２．開講コマ数および履修者数

2-1）開講コマ数

日本語表現科目のカリキュラムおよび開講コマ数は、**表Ⅰ-2** の通りである。

①　日本語表現 T1

本科目は１年前期に全学部学生が必履修する「基幹科目」の一つに位置づけられている。１クラス平均 35 人の比較的小規模なクラス編成で、全 68 コマを開講し、専任教員６人と非常勤講師３人で分担する。例年、新入生の数によってコマ数を変更することはせず、１クラスあたりの受講者数を調整することで授業運営をおこなっている。

なお、本科目の再履修者は、平成 24 年度までは翌年に開講される通常クラスで履修登録をおこなっていたが、平成 25 年度後期からは、原則として新設された再履修者専用クラスで履修することになった（前期２コマ、後期５コマ）。平成 25 年度開講コマ数が、68 コマから 73 コマに増えているのは、この再履修クラスが開講されたためである。

②　日本語表現 T2

本科目は、文学部・メディアプロデュース学部は必修科目、それ以外の６学部は選択科目として位置づけられ、「日本語表現 T1」の単位を修得した者のみが履修できる。

文学部とメディアプロデュース学部は、学科ごとに指定された曜日時限で受講する。それ以外の学部は、選択学部用に開講する 22 コマのうち任意の１コマを選び、履修登録をおこなう。履修希望者数が定員を上回った場合、原則として抽選ないしは増コマをおこなう。平成 24 年度は５コマ分、平成 25 年度は２コマ分を追加開講した。

なお、本科目の再履修者専用クラスは、平成 26 年度前期に新設される予定である（長久手キャンパスのみ、前後期各１コマ開講）。

③　日本語表現 A1, A2, A3, B1, B2, C1, C2

本科目群は２～４年の選択科目であり、平成 23 年度に開講した。「日本語表現 T1」の単位を修得した者のみが履修できる。授業は、前後期同一教員・同一内容でおこなわれ、履修順序や同時登録科目数の制限などは設けていない。履修希望者が定員を上回った場合は、抽選で履修者を決定する。

発展科目は履修希望者が多く、ビジネスコース（日本語表現 B1、同 B2）を中心に毎回抽選がおこなわれているが、落選者は来期の履修登録時に優先権が付与されるなどの対策が講じられている。また、特に履修希望者が集中する「日本語表現 B1」については、平成 24 年度に開講コマ数を 5 コマ増やし、現在は、前後期あわせて 11 コマを開講している。

表Ⅰ-2 日本語表現科目カリキュラムと開講コマ数（平成 22～25 年度）

科目名	必選の別	単位	開講年次	定員	担当者	開講コマ数			
						H22	H23	H24	H25
日本語表現 T1	必修	2	1 前	30	入口　愛 櫛井　亜依（H23-） 外山　敦子 西野　由紀（H22-23） 畑　恵里子 深津　周太（H24-） 森本　俊之 荒木　弘子（H23-） 小椋　愛子 杉岡　ふみ（H24） 鈴木　孝昌（H22-23） 長澤　理恵（H25）	68	68	68	73
日本語表現 T2	必修：文・メディア 選択：それ以外の学部	2	1 後	30	入口　愛 櫛井　亜依（H23-） 外山　敦子 西野　由紀（H22-23） 畑　恵里子 深津　周太（H24-） 森本　俊之 荒木　弘子（H23-） 小椋　愛子	33	44	49	46
日本語表現 A1〈ライティング〉	選択	2	2-4 前後	50	櫛井　亜依（H24-） 久保　朝孝 須田　真紀（H23）	―	4	4	4
日本語表現 A2〈スピーキング〉	選択	2	2-4 前後	30	奥村　由実（H24-） 榊原　千鶴（H23） 安田　朋江（H25-） 渡辺　真澄（H23-24）	―	4	4	4
日本語表現 A3〈リーディング〉	選択	2	2-4 前後	50	小倉　斉（H23） 佐々木亜紀子（H24-） 竹内　瑞穂	―	4	4	4
日本語表現 B1〈ライティング〉	選択	2	2-4 前後	50	桑本いづみ 下村　養子 高宮貴代美	―	6	11	11
日本語表現 B2〈スピーキング〉	選択	2	2-4 前後	30	樋口　貴子	―	6	6	6
日本語表現 C1〈ライティング〉	選択	2	2-4 前後	50	服部左右一	―	4	4	4
日本語表現 C2〈スピーキング〉	選択	2	2-4 前後	30	萩原　千恵 三久保角男	―	6	6	6

※開講コマ数は、年度当初予定数ではなく実際の開講数をあらわす。

2-2）履修者数の推移

平成 22 年度の科目開設から平成 25 年度までの履修者数および継続履修率は、**表Ⅰ-3** のとおりである。

表Ⅰ-3 過去4年間の履修登録者数と継続履修率の推移（平成 22～25 年度）

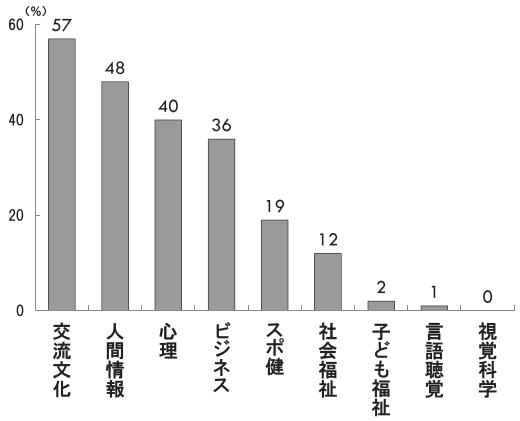
開講年度	〈基礎〉日本語表現 T1		〈応用〉日本語表現 T2		〈発展〉日本語表現 A1~C2	
	履修者数	継続履修率	履修者数	継続履修率	履修者数	継続履修率
平成 22 年度	2,369	―	1,169	49.3%	未開講	
平成 23 年度	2,258	―	1,170	51.8%	686	29.0%
平成 24 年度	2,271	―	1,438	63.3%	1,033	45.7%
平成 25 年度	2,530	―	1,477	61.0%	1,025	45.1%

※継続履修率：基礎科目「日本語表現 T1」を履修後、次レベルの科目を引き続き履修し、学修を継続している学生の割合。

「日本語表現 T1」の履修者数には、当該年度の入学者数によって若干の変動が生じている。平成 25 年度履修者数が過年度と比較して多いのは、後期に再履修者専用クラスが新設され、109 人が前期に引き続き後期も受講しているためである。今後は、2,500 人前後で履修者数が推移するものと思われる。

「日本語表現 T2」および「日本語表現 A1～C2」では、平成 24 年度に大きく履修者数が伸びた。全学生の３人に２人が「日本語表現 T2」を、同じく２人に１人が「日本語表現 A1～C2」のいずれかの科目を継続履修している計算になる。これは、当該年度に各科目の授業内容を紹介した PV を作成したり（「X 広報」参照）、履修相談会を開催したり（「V 学修支援」参照）したことにより、本科目群の意義と継続学修の必要性について、学生自身が認識を深めた結果であると考えられる。

なお、継続履修率については、学科専攻によって大きな差が生じている（**図Ⅰ-2**）。過去４年間、「日本語表現 T1」から「日本語表現 T2」への継続履修者がほぼいない専攻もあり、こうした学科専攻への対応が今後の課題として残されている。



図Ⅰ-2 過去4年間の「日本語表現 T2」学科・専攻別平均履修率（選択学部のみ、単位%）